

編集作業を終えて

平成二十一年秋、戦後六十五年の節目の年度を前にして、女性部と事業委員会は、対話集会を催し、年々鬼籍に入られ減少の著しいお母さん会員（戦没者の妻・遺児達の母）の方々の、ご主人との別れ、戦後のご苦労等についての証言を内容とする記念誌の作成を節目の年度の事業として取り組むことを合議決定しました。女性部長と事業委員長連名にて会長に計画を具申し、理事会、評議員会を経て、平成二十二年度の事業計画と予算措置が承認されました。

女性部会と事業委員会それぞれの役員改選後、新スタッフに事業計画を説明し、記念誌発刊に向けてのキック・オフを致しました。

双方から編集委員を各五名ずつ選出し編集委員会を発足させ、発刊を三月二十四日の県遺族会記念日を目標としてスケジュールを設定し、九月末締め切りとして原稿募集を行った結果、八十六編の応募を頂きました。

手書きの原稿等をパソコンに入力し電子データ化の作業は、事業委員会から作業部会を編成して自宅での作業をお願いしました。

編集委員会と作業部会は合同会議を行い、互いに補完しながら、全原稿について読み合わせを行い、誤字、脱字、表現方法、発刊趣旨との兼ね合い等について、忌憚のない意見交換を行いながら精査を実施、内容の一部を修正させていただいた原稿は、ご本人様に確認を取らせていただいたものもあります。

合同会議は、午前十時半に開始、午後五時を過ぎたことも再三であり、手弁当での協力を願う十五回を超える開催でした。

編集委員会・作業部会の方々は、それぞれに素晴らしい才能を持っておられる方ばかりで、遺族会の底力を感じます。多くの方との連携協力によって一つのものが成し遂げられることを再認識しました。日頃の活動にも、多くの会員の意見を幅広く汲み上げ、新しい発想も受け入れることが望まれます。

終わりに、投稿いただきました方々、それぞれが愛する人への尽きぬ思慕の念が行間にまで溢れ出しておりましたことを受けて、記念誌の表題は、夫に、父に、兄弟に、それぞれの想いを込めて「逢いたかった」とさせていただきました。

戦争により、幸せな家庭が壊されることが二度とない様、恒久平和を遺族会として希求してゆくことが使命であると強く感じました。

この記念誌は、女性部と事業委員会のチームワークと汗の結晶です。今後も互いに補完協力しながら、諸活動にこの経験を生かしてゆきたいと思えます。

尚、前女性部長小峰様にご助言ご指導を、事務局には種々の便宜供与をいただきましたことを申し添えます。

戦後六十五年記念誌編集委員長

事業委員長 森本 浩吉

追記

三月十一日発生の東日本大震災の日も合同会議中でした。発刊日が迫っていることもあり、余震、停電の中でしたが十七時半迄会議を継続したために、会議出席のメンバーは帰宅難民となっていました。

その結果、自宅や家族を心配しながらも、止む無く会館に宿泊や、横浜迄二時間以上歩いて駅周辺での宿泊を余儀なくされてしまったり、更に数時間掛けての徒歩帰宅となってしまうたメンバーが大半となったことは、記念誌発刊に際して忘れることの出来ないこととして追記しておきたいと思います。

被災された皆様に心からお見舞申し上げます。

(三月十五日 森本記)

編 集 委 員 会

副
委
員
長

委
員
長

渡
邊
玉
見

脇
坂
郁
子

山
田
和
子

森
本
浩
吉

別
所
宏
美

平
山
一
美

田
村
美
智
代

遠
藤
陽
子

植
松
幹
枝

青
木
康
浩

作 業 部 会

脇
坂
宜
志

森
本
浩
吉

森
久
保
幸
也

平
山
一
美

富
永
正
敏

久
保
田
昌
司

大
越
幸
雄

石
井
昭
男

赤
松
良
紀

逢いたかった

戦後六十五年を迎え

発行

平成二十三年三月二十四日

財団法人 神奈川県遺族会

〒233-0007

神奈川県横浜市港南区大久保一、八、一〇

電話 045(842)4243、5323

定価

1,000円

印刷・製本

情報印刷株式会社

〒213-0031

神奈川県川崎市高津区宇奈根718、15

電話 044(850)8861

